

ぼくらは自由に

一年 大北 隼矢

地球を出ると、し、黒の闇だった。きれいな流れ星がいくつも流れている。

他の車両では、地球との景色の違いに感動している人たちがいるが、ぼくは地上と同じように、格闘ゲームに夢中になっている。隣

では、相棒のポールドルのわこがスヤスヤと寝息を吐いている。

この電車は、^米数珠のようにいくつもの丸が連なる、ロケツトのような、車のような乗り物だ。緊急時には、それぞれ車両を切り離

あことがでさる。一日十本、太陽系の水星から金星を行き来している。

ぼくはこれから、天王星と海王星の氷の調査一実験とちまっつと観光^レに行く。なぜか

こ？ それは純粋な興味からだ。氷を溶かしこ、水にして、性質を調べ、自由研究にある。

ツX

車両には、あことぼくだけしかいない。こ

も、退屈はしないはず。AI、エアレンズ
かいるのだ。

「しりとりでもしようか」

「では、五百年前から続くキャラクターし

りとりしろ！」

A I が、しりとりのお題を決める。やって

みるけど、全く続かない。

「知らないよ。難しすぎる！」

「ドリル、ソムル、ルフィー、イエレス。

何で分からないんですか？」

A I はあきれた。ぼくも、ちやうどあきれ

た。

移動中、筋肉が減らないように、竹筋トレも

しっかひやっこおく。

この時期は、木星からスイングバードスピ

ードアップがあることができる。

「あこ、天王星に着いたよ」

一緒に出てきたヨーロッパの若者が写真を

撮取こく来た。ぼくはあこを抱いて、ピース

をした。

した。そして氷の実験だ。しかし、実は、何も
 言わずに來てしまい、よく分からなくなつて
 しまつた。

そこで、代わりに大人気スポットのダイヤ
 モントを掘る施設へ行くことにした。

発掘はけっこう難しい。やっこのことで探

し当て、ダイヤモンドのかけらをおさいふの
 中にしまつた。(後で気付くのだが、このダ

イヤモンドは天王星でしか存在できず、海王
 星に着く頃にはもうたよくなつていた。

17が大人になつたり、ダイヤモンドで
 きているかに座五十五番星eにも行つてみた
 くなつた。

氷の巨大惑星、海王星に着いた時には、自
 撮りをした。強い風が吹いて、すごく暑けれ
 いたから、後で見返すと、後ろに何が写つて
 いるのかわからなかつた。

氷はすぐに見つかった。氷をくだきなから

進む新種の魚を発見した。モグラのような魚

だつた。

「魚?」モグウ?」

どうやって呼吸をするのか。何を食べるの

か。もしかして、ヤバいのを見つけてしまっ

たんじやないか。さっぱり分かんかったあの

で溶解がした水と一緒に、地球へ持ち帰るこ

とにした。

ところで、最近分かったことがある。それ

は、地球に「国境」があるように、惑星と惑

星の間に「星境」^かがあるということだ。

例えば、地球の海に領海、排他的経済水域

公海があるように、宇宙空間にも見えないら

インがあるって、監視しあっている。(もしも

カリレオヤニードン、アインシュタイン大

先生が知ったら、目を見張ることだろう。

地球では、大昔に宇宙法ができた。そこに

は、「宇宙は地球人みんなのもの。独り占め

はいけなさい」と記されていた。たしかに、独

り占めはいけないう。けれど、一つ訂正があっ

た。「宇宙は、宇宙人(地球人を含む)のも

のしなものだ。」

なぜか、今はまだ一般人は宇宙人と直接会うことは禁止されているが、宇宙人はたしかに存在する。そして、地球人同士が領土を奪い合い、争っているように、宇宙人同士もまた争い合っている。

何でもないようなことから教室で小競り合いが起こるように、気を付けておかないと、いつでも地球人と宇宙人の衝突は起こりうる宇宙空間では、なおさら注意が必要だ。

宇宙。それは全この物質とエネルギーを包み、時間と空間の広がり。この世は、いくつもの宇宙が存在するマルチバースだ。地球を飛び出すと、いつでもそこには謎だらけの神秘が広がっている。

地球で文化や芸術、学術や技術などが国境を越えて広がったように、鳥や魚が空や海を自由に行き来できるように、われもが境を越えて、宇宙の奥深いところまで冒険できる未来が続いていくことを、ぼくは願っている。